

緑肥すき込みによるレタスビックベイン病の防除対策の検証

レタスビックベイン病の防除対策の一環として、緑肥作物のすき込みによる被害軽減効果について検討した。その結果、緑肥作物であるカラシナをレタス定植前の土壤にすき込むことによって生育初期の発病抑制効果が確認された。

内 容

レタスビックベイン病は菌媒介による土壤伝染性のウイルス病である。本病の防除対策としてレタスの前作にキャベツやブロッコリーを栽培し、その残渣をすき込むと本病の被害が軽減されることが知られている。

そこで、現地で一般的にレタスの前作に栽培されている緑肥作物すき込みによる被害軽減効果について、その程度を明らかにすることを目的に栽培試験を行った。

試験は2020年にビックベイン病発生圃場で実施した。供試した緑肥作物はカラシナ「地力」及びソルゴー「緑肥ソルゴー」とした。2020年5月22日に緑肥作物を播種後、7月9日に細断・すき込みを行った（写真）。この時のすき込み量は、カラシナ：1.6t/10a、ソルゴー：13.6t/10aであった。すき込み後は、無被覆で放置し、10月15日に罹病性品種のレタス「レガシー」を定植した。その後、経時的に発病株率と発病度を調査した（図1）。

本試験の発病は11月19日に確認した。同日の各区の発病株率及び発病度は、カラシナ区75.0%、43.6、ソルゴー区82.3%、55.5、無処理区86.4%、58.9であり、カラシナ区において発病度が低い傾向が認められた。しかし、11月26日及び12月3日



写真 試験圃場での緑肥栽培試験(6月17日)

の調査では、各区とも病勢が進展していった（図2）。収穫期である12月28日の調査では、いずれの区も90%以上の高い発病株率となり、発病度も同等であった（データ略）。

以上、現地で一般的に栽培されている緑肥作物のうち、カラシナで生育初期の発病抑制効果があった。

今後の方針

カラシナの被害軽減効果を安定させるため、すき込み量の違いによる効果の持続性や他の緑肥作物も視野に入れ、検証を進める。

川口 藍乃（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）



A：重症株（葉脈付近が顕著に退色）

B：中症株（葉脈付近が退色）

C：軽症株（葉脈付近が薄く退色）

発病度 = $\{(3A+2B+C) / (3 \times \text{調査株数})\} \times 100$

図1 レタス生育期の程度別病徴と発病度の算出方法

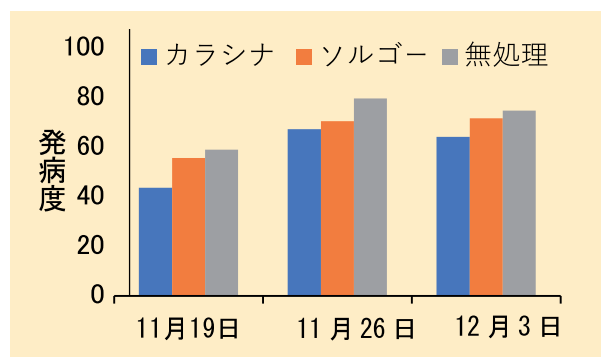


図2 レタス生育期の発病度の推移